

東アジアを調査する
—台湾における日本統治期の「遺産」と記憶—

柳 静我・柳原 邦光・岸本 覚・呉 玲青

Research for East Asia :
A Case Study of Memory on the Heritage of Japanese Reign in Taiwan

YU Jeungah, YANAGIHARA Kunimitsu, Kishimoto Satoru, Ling-Ching Wu

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第14巻 第3号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.14 / No.3

平成30年3月26日発行 March 26, 2018

東アジアを調査する

—台湾における日本統治期の「遺産」と記憶—

柳静我*・柳原邦光*・岸本覚*・呉玲青**

Research for East Asia:
A Case Study of Memory on the Heritage of Japanese Reign in Taiwan

YU Jeungah*, YANAGIHARA Kunimitsu*, Kishimoto Satoru* and Ling-Ching Wu**

キーワード：遺産，記憶，気づき，地域学

Key Words: heritage, memory, awareness, regional sciences

I. はじめに

鳥取大学地域学部地域文化学科では、「地域調査実習」（2年生必修科目，通年）で地域調査を行っている。全体のスケジュールは，4月に授業開始，10月末に学部内で中間報告，1月末に鳥取県民文化会館での成果発表会，5月に『地域文化調査成果報告書』刊行という運びである。東アジアグループは4つある調査グループの1つで，夏休みに海外で調査を行うことにしている。グループの活動は2014年度に「台湾の文化を考える一言語と媽祖信仰を通して」をテーマとしてスタートし，2015年度は「台湾と東アジア—牡丹社事件と民間信仰を通して—」，2016年度が「台湾における日本統治期の『遺産』と記憶」である。

学生の場合，実質1年間の活動で，『成果報告書』の作成をもって終了するが，教員は活動の成果をまとめて次年度の『地域学論集』に掲載することになっている。毎年の活動内容を記録するとともに，活動を通して得た経験や知見を整理し蓄積して，次の調査に活かすためである¹。

それだけではない。実はもう1つ大きな目的がある。学部創設以来の目標である「地域学の確立」に貢献するためである。いうまでもないことだが，地域学部の構想している「地域学」には足りない点が多々ある。たとえば，検討対象としている地域はローカル中心で狭い。ローカルな場から考えることは決定的に重要である。しかし，人の生をもっと大きな空間で考えることもまた必要なのではないか。かつて地域学部に在籍された韓燕麗さん（現在関西学院大学）は，2009年度「地域学総説」（地域学部3年次必修科目）で次のように語っている。「地域」とは，政治的なものではなく，流動的ではっきりとした境界線をもたない緩やかなつながりではないのか。そうだとすれば，人が自由に移動することが当たり前になった今，「地域」は国家の重苦しさ，生き難さを緩和してくれる「人々が生きるための未知なる空間」になりうるのではないか²。この指摘を「地域学」はしっかり

* 鳥取大学地域学部

** 台湾高雄師範大学歴史文化及語言研究所

¹ これまでの成果については，以下を参照。柳静我・柳原邦光・浅田萌・池本愛里奈・岡田紗希子・栗田瑞徳・徐元俊，2015，「東アジアを調査する—台湾語教育と媽祖信仰を通して—」，『地域学論集』第12巻第1号，柳静我・柳原邦光・呉玲青，2017，「東アジアを調査する—台湾の牡丹社事件と民間信仰を中心に—」『地域学論集』第13巻第3号。

² 韓燕麗氏の講義については，柳原邦光，2009，「地域学総説の挑戦4」，『地域学論集』第6巻第2号を参照。

受け止めなければならない。「地域学」はまだ期待に応えることができていないが、東アジアグループの担当教員は、海外の諸大学の協力を得ながら様々なチャレンジを続けている³。

それでは、次章以下で2016年度の調査活動を振り返り、どのような気づきがあったのか、新たな知見を加えることができたのか、考察することしよう。

II. 成果報告書の概要 (柳原邦光)

1. 東アジアグループの視点と台湾を選択した理由

最初に、東アジアグループの視点と台湾を選択した理由を手短かに確認しておこう。学生の『成果報告書』は冒頭で次のように述べている。「わたしたちは、国家でも陸地でもなく、海域という視点から人々の動きと文化のありようを考察したいと考え、その最初の一步として、四方を海に囲まれ、様々な人々が行き交った台湾を選んだ。」(2014年度)、「東アジアグループでは、『地域』を海域という視点から捉えて、東アジアという広域的地域を調査対象にしている。昨年度に引き続き、今年度も台湾で現地調査を行ったが、対象は19世紀後半に台湾で起こった『牡丹社事件』『台湾出兵』と中国大陸から伝来して今なお盛んな民間信仰である。2つを通して、東アジアにおいて様々な文化がどのような関係をもってきたのか、背景にどのような動きがあるのか、を考えるためのヒントを得たかったからである。」(2015年度)⁴。つまり、海域における人々の移動と、それによって生まれた様々な文化の関係性や重層性を、歴史的背景を含めて、捉えようとしてきたのである。このねらいは、2016年度の調査においても変わることはない。2016年度の調査日程は以下の通りである。

2016年度の台湾調査日程表

9月4日	関西空港で集合,出発,台湾台北到着。旧松山煙草工場(松烟誠品)を調査。101。台北宿泊。
9月5日	台湾大学(磯永吉旧高等農林学校作業室,文学院,人類学博物館),北投(文物館,大師岩,丹鳳山,地熱谷,普濟寺),芝山岩文化史公園を調査。台北宿泊
9月6日	真理大学(カナダ人伝教師が作った学校),淡水紅毛城(17世紀スペイン人の台湾における活動拠点),金瓜石(採掘場,行啓宿舍太子賓館,黄金神社遺跡,黄金博物館),円山台湾神社跡,基隆(有力港)を調査。士林夜市。台北宿泊。
9月7日	新幹線で台南へ移動。バスをチャーターして烏山頭ダムを調査。東山,九曲堂。高雄宿泊。
9月8日	バスをチャーターして台南へ移動。成功大学,知事官邸,公会堂,林百貨店,孔子廟,台湾文学館(台南州庁),安平(12名の戦没者墓地)を調査。老街。高雄宿泊。
9月9日	高雄発,関西国際空港着,解散。

³ 地域学部では、台湾での地域調査の他に、2016年度から夏に「東アジアプログラム」を実施している。これは中国厦門大学・韓国翰林大専校・台湾高雄師範大学の学生を鳥取大学に迎えて、地域学部地域文化学科学生と交流するプログラムである。また、韓国梨花女子大学とも相互研修プログラムを実施している。これらは「東アジアで語学力と現地感覚をもって活躍できる人材を育成するプロジェクト」の一環で、着実に進展し関係を深めている。詳しくは、柳静我,柳原邦光,2017,『東アジアプログラム』と東アジア『越境人』の育成,『地域学論集』第13巻第3号参照。

⁴ 鳥取大学地域学部地域文化学科,2015,『2014年度 地域文化調査成果報告』,同,2016,『2015 地域文化調査 成果報告書 2015』参照。

2. 「台湾における日本統治期の『遺産』と記憶」

本節では学生の作成した報告書の内容を紹介する。2016年度のタイトルは「台湾における日本統治期の『遺産』と記憶」で、構成は「はじめに」、「1. 台湾の蓬莱米」、「2. 烏山頭ダムと嘉南大圳」、「3. 裕仁皇太子の行啓」、「4. 植民地建築」、「おわりに」である。現地ではたくさんの写真を撮影したが、そのうちカラー写真16枚が収められている。全体で11頁である⁵。

(1) はじめに

最初に問題提起である。学生たちが立てた問いは、「日本統治期の『遺産』がどのように伝えられているのか、台湾の人々はその時代をどのように記憶しようとしているのか」、要するに「どのように過去と向き合ってきたのか」である。そして調査対象として選んだのは、台湾の人々の生活に直接に関わる問題、すなわち、食糧生産とそれを左右する農業用水供給システムである。具体的には、日本統治期に行われた「蓬莱米」開発と大規模水利施設の烏山頭ダム・嘉南大圳である。その他に、過去の記憶と密接に関わる対象として、裕仁皇太子の行啓と、はっきりと人々の目に見えて、空間に象徴的な意味を与える建築物について検討している。

現地調査では、雨風が強くて調査を断念せざるを得ないときがあり、行啓地と植民地建築の場合、予定した通りにはいかなかった。それでも大学の研究者、学生、関係者など10名もの方々に協力していただいたおかげで、期待した以上の調査となった。以下、報告書の目次に従って紹介する。

(2) 台湾の蓬莱米

蓬莱米は、台湾総督府の米増産政策に基づいて日本内地の米（ジャポニカ米）を品種改良してつくられた。開発したのは農学者で台湾総督府農業試験場・中央研究所育種技師であった磯永吉と技手の末永仁である。2人はともに「実り豊かな台湾に貢献した人」と称えられて、台湾大学の農芸学科関係者と実業家たちによって、2012年、台湾大学農学部旧農林学校作業室に銅像が設置された。そこには「台湾蓬莱米の父 磯永吉」、「台湾蓬莱米の母 末永仁」と記されている。先人が顕彰されることは日本人にとって嬉しいことである。しかし、実際にはそんな簡単な話ではなかった。

最初に蓬莱米の貢献を数値で確認すると、台湾の米生産高は約20年間（1921—1939年）でほぼ倍増し、米全体の輸出・移出量も約4倍に増えている。蓬莱米は確かに台湾経済に大きく貢献したといえる。ところが、蓬莱米開発によって台湾の人々がそれまでよりもたくさんの米を食べるようになったわけではない。台湾の人たちが口にしていたのは台湾の在来種（インディカ米）で、蓬莱米は日本人の食べる米として開発され、専ら日本内地へ供給された。しかも、藤原辰史『稲の大東亜共栄圏—帝国日本の「緑の革命」—』（吉川弘文館、2012年）によれば、蓬莱米は肥料依存性が高く、日本の栽培技術とたくさんの肥料を使用しないとうまく栽培できなかった。蓬莱米を栽培することで、台湾の農民たちは日本の農業技術と肥料に依存し従属することになったのである。そうだとすれば、磯永吉と末永仁は蓬莱米を開発することで植民地支配に関わっていたことになる。

報告書が疑問に思ったのは、「なぜ2人が顕彰されたのか」である。そのため、蓬莱米が戦後たどった道筋を追っている。ごく簡潔にまとめれば、敗戦で日本人が引き揚げると、台湾の人々は蓬莱米にさらなら改良をくわえた。2015年時点のデータを見ると、蓬莱種は在来種の100倍もの生産高

⁵ 鳥取大学地域学部地域文化学科、2016、『2016年度 地域文化調査成果報告』、1—11頁。なお、引用文の頁表記は省略する。

に達している。蓬莱種は今や台湾の人々の食する米となったのである。以上の事実から、報告書は次の結論に至った。蓬莱種は、日本統治期から現代にいたるまで、台湾の農業と経済において大きな意味をもち続けた。しかし、大きな変化が生じている。かつて日本内地向けであった蓬莱米は、戦後、蓬莱種として台湾の人々が毎日食する米となった。磯永吉と末永仁の評価が高まった背景には、蓬莱米・蓬莱種の台湾社会における位置づけの変化があった。美味しい米を食べることができるのは、2人のおかげだということが可能になったのである。

しかし、それでも疑問が残る。なぜ2012年なのか。報告書は、次のように民主化後の台湾のアイデンティティ形成と関係があると考えている。すなわち、中国大陆と台湾は一つの国家に属するという「一つの中国」を主張する中国政府に対して、台湾では「台湾らしさ」、すなわち「本土化」が希求されるようになった。この動きのなかで、日本統治期に起源をもつ遺産も「台湾らしさ」を構成する、台湾にとって重要な文化遺産、とみなされるようになった、というのである。

報告書が磯永吉と末永仁の銅像設置という顕彰行為の背景に見たのは、台湾社会の米生産に関わる変化と、過去を将来に向けて活かそうとする選択だった。

(3) 烏山頭ダムと嘉南大圳

次に大規模水利施設の烏山頭ダムと嘉南大圳である。ダムは1920年に建設が始まり1930年に完成した。ダムに貯えられた水(満水時貯水量 1.5 億 m^3)は巨大な水路網によって嘉南平原一帯に供給された。ダムを含む水利設備全体を「嘉南大圳(かなんたいしゅう)」というが、これは総延長16,000km、総工費約5,400万円を要した大工事であった。建設の中心として現場で指揮を執ったのは、八田與一(1886-1942)である。八田與一とその業績に対する高い評価は、教科書で紹介されたり、2011年に烏山頭ダムに「八田與一記念公園」がつくられたことから想像できるが、李登輝元総統の言葉にも現われている。「新幹線の窓から、台湾最大の穀倉地帯に生まれ変わった嘉南平原を見渡すと、青々とした田園が広がっている。そこに『嘉南大圳の父』八田與一の義の精神が眠っていることを、台湾人は永遠に忘れないであろう。」⁶

学生たちも、実際に現地を見て、烏山頭ダムが台湾の人々の生活に役立っているという印象をもった。ところが、清水美里『帝国日本の「開発」と植民地台湾』(有志舎, 2015年)によれば、当時の農民たちは烏山頭ダムを含む嘉南大圳に強い不満を抱いていた。著者は、巷間で語られる八田與一像を現実とは異なる「物語」だという。そうだとすれば、このギャップはなぜ生まれたのか。これが学生たちの疑問となった。

清水氏によると、嘉南大圳は確かに大幅な増産をもたらしたが、それは農民たちにとって費用負担に見合うものではなかった。期待したほど水量がないために3年輪作を強制され、自由に栽培できなくなったからである。しかし、戦後、状況が変わる。1973年、上流に曾文ダムが建設されて、7億753万 m^3 の水を供給し始めたからである。水不足は解消され、3年輪作の必要もなくなった。農民たちの不満はようやく解消されたのである。このほかに、内地への移出用に栽培されていた蓬莱米が、戦後、台湾人も食べるようになったことも重要である。日本統治期に嘉南大圳は日本内地に米を送るための水利設備であったが、戦後、台湾の人々の食する米を生産する設備となった。こうして、嘉南大圳のおかげでおいしいお米を食べることができる、と考えることのできる状況が生まれた。

⁶ 李登輝, 2015, 『新・台湾の主張』PHP研究所, 29頁。

八田の評価については、烏山頭ダム完成直後の1931年に設置された八田與一像のたどった運命も参考になる。像は、太平洋戦争末期、金属供出令により徴発されたはずであったが、何者かによって守られ、戦後、発見された。しかし、再設置されたのは1981年である。戒厳令解除前であるから、八田がある程度評価されていたことは確かであるが、台湾の歴代総統が八田を讃えるようになるのは、2000年代になってからである。2011年の「八田與一記念公園」を含めて、評価の高まりは政治状況を含めた戦後の状況変化と関係している。

烏山頭ダムと嘉南大圳の意味変化、蓬莱米・蓬莱種の台湾社会への定着、そして政治状況の変化などが重なって、八田與一の事績は身近に接して八田の人間性をよく知っていた人たちを越えて広まり、評価が高まったといえるのではないか。これが烏山頭ダムと嘉南大圳と八田與一について報告書のたどり着いた結論である。

(4) 裕仁皇太子の行啓

行啓調査の目的は、「行啓がこんにちの台湾の人々にどのように記憶されているのか」である。報告書は、予定していた調査が悪天候で十分行えなかったこともあって、裕仁皇太子の行啓地のうち、孔子廟（台南）と、行啓を予定されていたが急遽キャンセルされた旧金瓜石鉱山（台北）、そして旧日本軍の基地であった国立成功大学（台南）について報告するにとどまった。

まず孔子廟である。報告書が着目したのは、行啓の様子を写した写真が廟内で展示されていたことである。台湾の人々にとって不愉快な思いを想起させるかもしれない写真をなぜ展示しているのか。しかし、廟で最も重要な孔子の位牌が祀られている部屋に入ったとき目に飛び込んできたのは、位牌の上に掲げられていた清朝時代の歴代皇帝や中華民国総統の扁額である。2つを比べてみると、裕仁皇太子の行啓も孔子廟350年余りの歴史から見れば、歴史のほんの1コマでしかなかった。

金瓜石では、観光ボランティアで90歳の張阿輝さんに学生たちは注目した。日本統治期に金瓜石で生まれ、公学校で学んだ張さんは、卒業後、鉱山を経営していた日本鉱業に入社して、採掘処理技術や作業方法を外部の人に説明する仕事に従事した。学生たちは、当時の思い出や場所の説明をととても嬉しそうに語る張さんの様子から、金瓜石で生まれ育って働いたという誇りを感じ取り、その時代を負のイメージで捉えていない、という印象をもった。特に、日本鉱業がつくった黄金神社跡で、張さんが、子どもの頃、お祭りで歌った歌を楽しそうに披露する様子に、当時の経験が深く刻まれていることに驚いている。

国立成功大学では、清朝時代の城壁や日本陸軍の基地だったことを想起させる建物が残されていた。報告書は旧陸軍の宿舎であった星のマークが建物にあること、しかも時とともに薄れてしまったものを、わざわざ刻み直し、復元していることを指摘している。成功大学では、陸軍基地であった痕跡を消し去るのではなく、むしろ記憶として掘り起こそうとしているように思えたからである。

行啓地では、身体化されて消えることのない記憶のあることや、歴史的出来事を拒否するのではなく、長い歴史の中に組み込もうとする姿勢を学生たちは感じ取っている。

(5) 植民地建築

報告書は植民地建築として日本統治期の近代的建築物を3つ取り上げている。林百貨店（経営者の林方一が1932年に建設した百貨店、当時最先端の近代的様式の建物、1998年古蹟指定、2014年に文化創作の新しいスタイルの特産品販売施設「林百貨」として開業）、台湾総督府専売局松山煙草工場（1937年建設、近代的工場の先駆け、2001年に古蹟指定、2011年に展覧会や芸術活動を行う

文化総合施設「松山文創園區」となる)、台南州庁舎(2003年、国立台湾文学館として開館、古蹟指定)である。どのような意味で建築物に着目したかといえば、「建築物はそれが建てられた時代と人間の意志を総体として反映した存在」⁷であるとの西澤泰彦氏の言葉を受けて、「建築物を見ることで、台湾の人々にとって日本統治期がどのようなものとして記憶されようとしているのか知ることができるのではないか」と考えたからである。

学生たちが現地を訪ねてすぐに確認できたことは、植民地建築が破壊されることなく、歴史的建造物の1つとして社会的・文化的価値を認められ、地域の歴史を物語る遺産、都市開発のための資産とされ、活用されるようになってきていることである。この意味を考える上で重要なのは、いずれも古蹟に指定されていることである。上水流久彦氏によれば、2006年8月までに台北市で日本統治期の建築物として古蹟指定された建物のうち実質的に9割以上が1995年以降の指定で、このような動きは1995年以降に始まる台湾の「本土化」の急速な展開と関連している。というのは、古蹟は集合的記憶を生み出す装置だからである。そうだとすれば、なぜ日本統治期の西洋建築物が多く指定されているのか。それは近代化の「見証」と認識されているからである。古蹟指定は台湾から見て価値があるからなされるのであり、日本出自はさほど重要ではない。指定された植民地建築は、中国本土とは異なる台湾独自の経験を示すものとして、台湾の歴史と独自性を構成する重要な要素とみなされている⁸。

報告書は植民地建築のまとめとして、次のように締めくくっている。植民地建築は決して支配と権力を誇示するためだけの建築物ではない。台湾の人々は時代とともに植民地建築への考えを改めていき、こんにちでは地域の歴史を示す遺産とみなすようになった。植民地建築の外観は変わらず保たれたが、建物自体が担う役割は変わった。変化したのは、植民地建築ではなく、台湾の人々の意識だった、と。

(6) おわりに

2016年度の調査目的は、日本統治期の「遺産」を調べることで、「台湾の人々が過去とどう向き合っているのか、どのように記憶しようとしているのか」を少しでも明らかにすることだった。しかし、「おわりに」ではもう1つ別の動機があったことも記されている。「植民地統治であっても何か台湾の人々に貢献したことはないだろうか」という思いである。そのため報告書は日本統治期に日本人の残した「遺産」を今日の台湾の人々がどのように受け止め、記憶していこうとしているかを問う形になった。

調査を通して得たものとして記されているのは、以下の2つである。蓬萊米、烏山頭ダムと嘉南大圳のいずれも、台湾人の生活を支えるようになるのは戦後になってからである。日本人の努力もさることながら、事業を受け継ぎ活用した台湾人の努力も大きい。このような日本統治期からそれ以降も続けられた努力に、民主化や本土化の動きが重なって、日本人の事績を見る目が変わったのではないか。台湾の人々によって想起され選び取られる過去が変わったのではないか、ということである。もう1つは、裕仁皇太子の行啓地や植民地建築の取り扱いが示しているように、過去のなかから台湾人から見て意味あるもの、価値あるものを歴史的記憶として将来に活かそうとする意思に気づいたことである。

⁷ 西澤泰彦, 2009, 『日本の植民地建築～帝国に築かれたネットワーク』河出書房新社, 11頁。

⁸ 上水流久彦, 2011, 「台北市古蹟指定にみる日本, 中華, 中国のせめぎ合い」, 植野弘子・三尾裕子 『台湾における〈植民地〉経験 日本認識の生成・変容・断絶』風響社, 32-36頁。

最後に、このような気づきは学生たち自身に向けられる。「台湾の人たちの目に過去はどう映っているのか、歴史に何を見ようとしているのか、現在を見るまなざしとどう関係しているのか」を問うことによって、自らが歴史と現在にどう向き合うのかという「問い」を得たのである⁹。

III. 調査のねらい（呉玲青）

本年度は、台湾の歴史において外来の統治者が残した遺産を中心に調査した。17世紀半ば、スペインとオランダは台湾の北部と南部を占領した。台湾北部の淡水にある紅毛城は、1628年にスペインが建設した要塞である。約200年後の19世紀後半に西洋人が再び大量に台湾に入ってきたとき、イギリスが領事館として利用したことで、紅毛城は再び西洋人の拠点となった。

紅毛城の隣には、真理大学 (Aletheia University) がある。このキャンパスは、1882年、カナダ人の George Leslie Macay が設立した牛津学堂 (Oxford College) である。Macay は、1871年に長老教会の牧師として宣教のために台湾入りし、宣教の助けとして医療と教育に注目した。今回の調査では、3日目に紅毛城と牛津学堂を訪ねたが、それは、19世紀末に台湾北部の西洋人の活動地区で、西洋諸国の人々による近代的な外交関係と教育体制の移入がどのように行われていたのかを確認するためだった。

1895年、日本は台湾総督府を通じ、台湾統治を始めた。初期の財政的基盤は台湾統治に不十分であったが、20世紀以後、製糖業の資本が台湾に入って、財政問題は次第に安定化していった。植民地の近代化を促進する帝国として、台湾総督府は農業部門で米の品種の改良に勤め、新しい品種を開発した。「蓬萊米」である。「蓬萊米」の輸出は台湾農業のレベルを引き上げた（調査2日目の午前、台湾大学農学部所属の「磯小屋」を訪ねた）。さらに、タバコなどの経済作物の製造工場を建設した（初日に松山タバコ工場を訪ねた）。4日目に調査した烏山頭ダム建設は、嘉南平原の広大な水田を実現する灌漑施設の整備につながり、台湾の農業経済は植民地期に発展していった。

そのほか、台湾総督府は近代学校教育を通じて人材育成を行った（5日目に訪ねた国立成功大学の前身は、1931年設立の台南高等工業学校である）。北投の衛戍病院は本来、日本軍将官の療養施設として作られたのであるが、その存在は台湾人のお風呂文化に影響を及ぼした。また、台湾での近代的な衛生観念の確立・休憩などの社会風俗形成によって、北投は次第に温泉の名所となった（2日目に訪ねた北投の温泉博物館等）。デパートの設立（5日目に訪ねた台南の林百貨店）なども含め、これらは台湾人の社会生活の大きな変化を示すものであるといえる。

その一方で、台湾総督府の統治期間中に高圧的で差別的な側面があったことも無視できない。台湾人を同化させるため、台湾総督府は台湾各地に神社を設置し、参拝を強要した。3日目に訪れた金瓜石の黄金神社はこのような側面を示すものである。政策の宣伝と戦時動員の必要性から、各地に設置された公会堂（台南公会堂）、元台南州庁（現台南文学館）、台南知事官邸（すべて5日目に調査した）等の建物は、現在、新たな文化拠点となっている。

日本植民地時代の統治の遺産は、台湾各地に残された古い建物（台南の日本統治時代の建築）、建設（北投温泉、烏山頭のダム）、物産（米の品種改良）、教育など、依然として、有形無形の影響を發揮しており、歴史の蓄積を表わしている。学生たちに知ってほしかったのは、今日の台湾のこのような側面である。

⁹ 報告書は最後に参考文献を記しているが、これについては表示を省略する。

IV. 調査の教育的成果 (柳静我)

地域文化学科2年次の「地域調査実習」で東アジアグループがスタートして、今回は3回目の台湾調査となった。毎回、学生たちは様々な理由で東アジアグループを選ぶ。今回も前期の文献調査と中国語学習を経て、夏休みの9月に5泊6日の日程で現地調査を行った。参加者数は、これまでの東アジアグループで最多の17名である。

現地調査までのプロセスを少し詳しく説明すると、まず、前期の授業では、文献調査と中国語学習を行った。この過程で、学生たちは少しずつ台湾の基礎知識を身につけ、調査テーマを決めた。その後、学生たちが決めたテーマについて、台湾高雄師範大学の呉玲青先生と事前に電話とメールで、調査場所・インタビュー・台湾の専門家の講義などについて何度も打ち合わせを行って、綿密に調査計画を立てた。

台湾では、学生たちは異なる文化・歴史・生活環境を肌で感じながら、台湾の専門家の説明に耳を傾け、インタビューを行い、自分たちが抱えている疑問への答えを見つけ出そうと積極的に調査に取り組んだ。帰国後の後期授業は、現地調査を通じて確認した内容や新たに得た疑問を整理しつつ、文献を探して精読し、意見を交換し合って、問いの答えを見つけていくという形で進めた。10月の学部内での中間発表を経て、12月以降は、1月の調査実習発表会に向け、まとめと発表原稿の執筆、PPTの作成に奮闘した。調査実習発表会を無事終了後、報告書の完成をもって、1年間の授業は終わった。

この過程で学生は様々な面で刺激を受け、成長していったように思われる。率直に言って、17名の学生全員が高いモチベーションをもって東アジアグループを選択したわけではない。外国に行ってみたいという素朴な好奇心で選ぶ学生も少なくなかった。それだけに、学生たちをまとめあげ、調査テーマを設定し、調査に向けて様々な準備をするのは、容易なことではなかった。前期には全員が中国語の授業をするわけであるが、1年生から第2外国語で中国語を学んできた学生はほとんどとして、他の外国語を選んできた学生にとって、中国語はなかなか難しかったようで、学生間でのレベルの差が大きかった。授業を進める上で、これはなかなか難しい問題だった。

このような課題を抱え、最初はなかなか順調に行かないことが少なからずあった。それでも学生たちは遅々とした歩みではあったが、あきらめずに進んでいった。様々な文献を読み、現地の言葉に接することで、台湾への興味は更に高まった。9月の現地調査では、学生たちは現場で違う文化・歴史・生活を体験して、自分なりに理解し、何かを体得していったようである。帰国後、新たな課題に取り組み、文献講読をすすめるなかで、前期とは違った学生たちの真剣さを感じ取ることができた。さらに、日本を基準として台湾を見るという当初の視線とは違って、台湾に内在する目線から課題を分析し理解しようとする姿勢も窺えた。なかには、中国の文化と歴史、そして中国語に強い興味を抱いて、中国廈門大学でのプログラムに参加し、さらには留学する者まで出てきた(廈門大学人文学部に1名が留学した)。また、韓国梨花女子大学でのプログラムに参加した者もいる。東アジアという「地域」を学びの場とし、広い視点からそれぞれの歴史と文化に興味をもつ学生たちが現れたのである。

台湾での地域調査実習は、1年間台湾に向き合ったというだけでなく、韓国のソウルや中国廈門でのプログラム、鳥取大学での4大学の学生(廈門大学、翰林大学校、高雄師範大学、鳥取大学地域学部)を集めた東アジアプログラムへの参加にもつながっている。台湾地域調査実習は学生たちが自分の関心と学びをさらに広く深くするきっかけを提供する役割を果たしているといえるだろう。

V. 調査に同行して一金瓜石鉱山と神社から見えること一（岸本覚）

台湾調査に同行させていただき、今回の調査で関心を持ったことを2つ書き記しておきたい。

まず、金瓜石で出会った張阿輝さん(90歳)とともに登った黄金神社跡で、張さんから聴いた「歌」についてである。そもそもこの神社の説明板には、「金瓜石山神社」とあり、祭神は「大國主命」「金山彦命」「猿田彦命」であるという。国土の開拓神と鉱山の守護神を祀った神社である。その参道の石燈籠には「昭和十式年七月吉日」の文字がうっすらと見え、本殿跡の鳥居には「金瓜石鉱山事務所一同」、同所石燈籠には「取締役一同」の文字が読み取れることから、日本統治時代に全面的に改修されたことがわかる。現地の黄金神社の説明板による

と、日本鉱業がこの鉱山を経営しはじめてから建立されたものであったことが記されている。日本鉱業は、前身が久原房之助開設の日立鉱山事務所で、1912(大正元)年9月に久原鉱業株式会社に改組、第一次世界大戦のなかで急速に成長し、海外に積極的に進出した。その後経営は悪化するが世界恐慌後なんとか再建に成功していく。

この金瓜石は、台湾の玄関口である基隆のすぐ近くにある。基隆は、日本統治時代の港湾都市で、ほとんどの日本人がここから台湾に上陸するだけでなく、国際的な港でもあり、まさに台湾の玄関口であった。もともと、台湾北東部は鉱床が広範囲に存在する地域であったが、大正13年(1924)基隆・宜蘭線が全線



黄金神社跡（筆者撮影）

開通することでさらに鉱業が発展する条件がそろった。こうした交通の要衝という条件がさらにこの近辺の鉱山業を発展させる背景にあったものと思われる。我々が訪れたときも大雨であったが、もともと三方を山に囲まれた場所で雨が多く、「雨港」と称されるほどであったという(以上、片倉佳史『台湾—日本統治時代の50年』祥伝社、2015年参照)。

『台湾鉄道旅行案内1942年』(近代台湾案内集成第6巻、2013年)によると、金瓜石には基隆からバスで55銭24分、宿泊場所は「金瓜石鉱山ホテル(駅より7軒〔キロメートル〕、8室、1.5円〜3円)」であるという。

前述した通り、張さんは、日本鉱業がつくった黄金神社跡で、調査当日には張さんが、子どもの頃にお祭りで歌った歌を披露した。私が個人的に「どなたから教わった歌ですか」と質問したところ、その歌を教えてくれたのは鳥取県出身者だと答えられた。たいへん驚いたが、巡り合わせというのはこういうものであろう。帰国後いろいろと調べてみたが残念ながらそれに関わる手がかりはまったくなかった。ただ、鳥取県立図書館HPの郷土人物データベースで「台湾」をキーワードに検索してみると、台湾の民政局勤務の役人、僧侶、教員、軍人、実業家等々意外と多くの関係者がいることがわかる。移民や移住に関わる観点からは、台湾の注目度は高いとは言えないかもしれないが、今後探究する意義は十分にあると思う。

とりあえず辛うじて聞き取れた張さんの歌った歌詞は以下の通りである。

祝いの我が町よ ええさまよ 枝も栄えて葉も茂る
千代の神いさめ (わっしょい わっしょい)

2016年9月16日調査日に筆者撮影より復元

「枝も栄えて葉も茂る」から察せられるのは、昭和戦前期の労働者の唄の系統で、後の「花笠音頭」に代表されるものであろう。こうした労働者の唄が、台湾の鉾山の神社で歌われていた。神社の祭礼のときに歌われていたというから、「めでためでたの 若松様よ 枝も栄えて 葉も茂る」系統のまさに「祝い作業唄」と言えるもので、これは全国的に展開していたものである（房前和朋・竹林征三「労働唄・どんつき節による土木技術史の研究」『土木史研究』16, 1996年）。

歌詞の内容はともかく、こうしたものには様々なバリエーションがあるが、メロディーは国境をもこえて伝播していくことが確認できる。私の亡くなった祖母は明治生まれであったが戦前戦中期において、ほとんど教育を受けていないため、文字も読めないし、字も書けなかった。しかし、教育勅語や行事に歌われた歌などはほぼ完璧に覚えていることにいつも驚かされた。意味を理解していなくても、音で残っていくこうした民俗的世界をどのように考えていったらいいのか。この旅の中で考えさせてもらった貴重な課題である。



一九四二金瓜石事件記念岩誌（筆者撮影）

次に、時間の関係で学生たちとゆっくり見ることができなかったが、1942年6月に勃発した「金瓜石事件」の記念碑もここには残されていた。日本政府から中国との内通や反乱を画策したなどの理由ををでっち上げられ100余人が投獄されたという。戦後、国民党政権下においても関心をもたれること

なく、33名が獄中で亡くなった。その人名が刻まれている。

この事件については、日本史の基本文献にも、個別論文にも見ることができないし、主な歴史関係の辞書にすら掲載されていない。詳細が不明ということが原因であろうが、この記念碑がなければ全く闇に葬られる歴史となってしまう。インターネットで検索すると台湾のメディアでは比較的高く取り上げられている事件であるが、台湾における日本統治時代の問題は考えているほど簡単ではないことは明らかである。

以上、この台湾の調査で印象に残ったことについて2点記述させていただいた。今後植民地という問題を歴史学として考える場合、戦後さまざまな時代背景のなかで揺れる歴史意識の問題は、つねに注視していかなければならないと思う。こうした海外の調査体験を通じて、今後学生たちとともに教員側も様々な問題と向き合っていくことが肝要であろう。

VI. おわりに

地域調査を台湾で行う意味はどこにあるのか、といまさらながら思う。年々参加者が増えて、今回は学生17名と教員3名、総勢20名の参加である。現地では、毎年、呉玲青さんと楊朝傑さんに同行していただいている。それだけでなく、現地調査すべき場所の選定から関係の方々への協力依頼、現地での説明など、大変お世話になっている。他にも高雄師範大学の学生さんや専門家、関係者の方々の協力がある。短期間の調査であるが、そのすべてを考えると、大仕事である。

もちろん、「はじめに」で述べたように、調査にはそれなりのねらいがある。しかし、台湾調査を始めたときは、3年も調査を続けることになろうとは思ひもしなかった。そもそもなぜ台湾を選んだのか、明確な理由は思い浮かばない。とにかく夢中になって調査してきたので、台湾で行う意味など、考える余裕がなかったのかもしれない。

立ち止まって考えてみれば、「II. 成果報告書の概要」の最後と「IV. 調査の教育的成果」で述べ

たように、学生たちは調査することで、実に多くのことに気づいてきた。自分たちの見方を振り返り、内省を深めつつ、まなざしを東アジアに向けるようになった。様々なプログラムにも参加して、いつの間にか中国・韓国・台湾の学生たちと仲良くなっている。驚きの、うれしい変化である。

変わっていくのは、実は学生たちだけではない。わたしたち教員も同様である。「V. 調査に同行して―金瓜石鉱山と神社から見えること―」でも述べたように、教員もまた様々な「気づき」をえているからだ。現地調査の準備から成果報告書の作成に至るまでの過程で、学生たちと「気づき」を交換し、言葉にし、文字にしていくなかで、心に刻み込んでいる。東アジアは、いつの間にか、親しい人々の顔が見える、なじみの空間になった。

